

沖縄戦で犠牲となった朝鮮人の 慰霊碑（塔）・追悼碑に関する研究ノート

金 美 恵*

A Research Note on the Monuments for Korean Victims during the Battle of Okinawa

KIM Mihye

要 旨

本稿は、沖縄戦で犠牲となった朝鮮人の慰霊碑（塔）・追悼碑についての調査と考察をまとめた研究ノートである。沖縄県には現在、本島をはじめ慶良間、久米島、宮古、八重山などに、沖縄戦で犠牲となった朝鮮人軍夫や日本軍「慰安婦」犠牲者の戦争被害の実態を記憶するための追悼碑が建立されている。これらの慰霊碑（塔）・追悼碑のある本島の摩文仁、宜野湾、読谷村の3カ所と、渡嘉敷島の2カ所、久米島、宮古島、石垣島の3カ所を巡り、慰霊碑（塔）・追悼碑の撮影、所在地と設置日、設置者の確認などの基本調査を行った。また、慰霊碑（塔）・追悼碑が建立された背景、沿革などについて文献・新聞などの関係資料と現地でのインタビューなどを照合しつつ構成し、慰霊碑（塔）・追悼碑の建立主体とその年代の特徴を探ることで、沖縄戦で犠牲となった朝鮮人がどのように慰霊・追悼されているのかその性格について考察した。

キーワード：沖縄戦、慰霊碑（塔）、追悼碑、朝鮮人軍夫、日本軍「慰安婦」犠牲者

1. 慰霊碑（塔）・追悼碑の調査と考察の目的

周知のとおり沖縄本島、慶良間、宮古、八重山など全島を巻き込み激しい戦いが繰り広げられた沖縄戦において、おびただしい沖縄住民の被害と合わせ、計り知れない朝鮮人の犠牲もあった。現在、この犠牲を弔い悼み、祈念する碑が沖縄県に9カ所あることが確認されている。今回の慰霊碑（塔）・追悼碑の調査の第一義的な目的は、この9カ所にある慰霊碑（塔）・追悼碑の現住所を確認し、いつ、誰が、朝鮮人のどのような犠牲について弔い・追悼したのか

* 東京大学大学院特任研究員

を調べ、碑がつけられた背景や碑文の内容、追悼の形式を調べ記録することで、沖縄と朝鮮半島のトランスナショナルな記憶についてのアーカイブの構成と内容を検討することにある。

また、これらの沖縄戦における朝鮮人犠牲者の慰霊碑（塔）・追悼碑を調査することで、沖縄戦で犠牲になった朝鮮人がどの様に慰霊・追悼されているのかを探り、その建立主体と年代の特徴、また慰霊碑・追悼碑から見えてくる「戦争責任」と「植民地支配責任」をめぐる日本と沖縄、朝鮮半島の関係性について考察したい。

調査対象とした慰霊碑（塔）・追悼碑は、次のとおりである。渡嘉敷島にある(1)「白玉之塔」、宜野湾市の嘉数の丘にある(2)「青丘之塔」、久米島の(3)「痛恨之碑」、糸満市摩文仁の丘にある(4)「韓国人慰霊塔」、(5)「平和の礎」、そして渡嘉敷島の(6)「アリランのモニュメント」、(7)石垣島の「留恨之碑」読谷村の(8)「恨之碑」、宮古島の(9)「アリランの碑」である。

2. 調査内容

各慰霊碑（塔）・追悼碑について、撮影（一部提供）、その所在地、設置者、設置日、碑文と碑の特徴、沿革の6つの項目に沿って調査した。なお、以下に列挙する慰霊・追悼碑はつけられた年代の順で並べた。

(1) 白玉之塔

所在地：渡嘉敷村字渡嘉敷イシッピ原

設置日：1951年3月28日 建立

1962年4月 移転改修

設置者：渡嘉敷村遺族会

碑文：「忘れじと思う心は白玉の塔に残して
永久に伝えん 中井盛才」（日本語、英語、
中国語、朝鮮語）

沿革：1944年、米軍の激しい爆撃が始まり、米軍が上陸した3月27日から28日にかけて、渡嘉敷島では島民330名が「集団自決」という悲劇が起こった。「白玉之塔」が立っている敷地内にある「戦没者慰霊碑（塔）白玉之塔関係資料」によれば、塔は最初、1951年3月28日に「集団自決」があった場所（カーシー原）に建立したが、米軍の通信基地建設に伴い1962年4月19日に現在の場所に移転改修された。「白玉之塔」には本土軍人81名、



白玉之塔



白玉之塔 碑文

軍人・軍属91名、防衛隊42名、住民383名、そして「慰安婦」一人が祭られている。

この関係資料には朝鮮人犠牲者の数についても記録があるが、村民の知念朝睦さんの証言を記録したその内容によると、処刑された3名と餓死した7名の計10名の朝鮮人と、上記「慰安婦」1名の計11名の朝鮮人犠牲者がこの「白玉之塔」に祭られていることになる。渡嘉敷島には日本軍が設置した慰安所が2カ所あり7名の朝鮮人「慰安婦」がいたが、「白玉之塔」に祭られたこの「慰安婦」はこのうちの一人で「ハルエ」と呼ばれていた朝鮮人女性であった。ハルエさんは米軍機の機銃掃射によって亡くなったが、自宅を兵隊の待合場所にされて「慰安婦」の身の上話を聞いていた島民の新里吉枝さんによって、この「白玉之塔」に納められた¹。

(2) 青丘之塔

所在地：宜野湾市嘉数嘉数台公園内

設置日：1971年3月

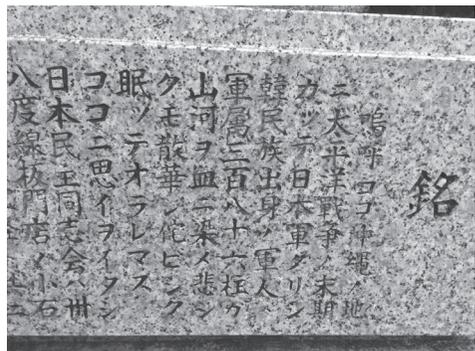
設置者：日本民主同志会

碑文：「銘 嗚呼ココ沖縄ノ地ニ太平洋戦争ノ末期カツテ日本軍タリシ韓民族出身ノ軍人軍属三百八十六柱ガ山河ヲ血ニ染メ悲シクモ散華シ侘ビシク眠ッテオラレマス ココニ思イヲイタシ日本民主同志会ハ廿八度線板門店ノ小石世ハケヲ写経ト共ニ碑礎ニ鎮メ、イデオロギート国境ト民族ヲ超越シ人道主義ヲ遵奉シ、哀シキ歴史ヲ秘メタコレラノ御霊ヲ慰霊顕彰スルタメニ、最モ激烈ナル戦闘ヲ展開シタ戦跡嘉数ノ高地ニ志ヲ同ジクスル諸賢、アワセテ関係機関並ニ地元嘉数地区ノ御協力ヲ得テ、韓民族出身沖縄戦戦没者慰霊碑（塔）「青丘之塔」ヲ建立シ永久ニ英勲ヲ讃エマス 昭和四十六年三月吉日 松本明重 識」

沿革：「青丘之塔」は碑銘の右に「韓民族出身沖縄戦戦死者慰霊」と刻まれていることからわかるように、沖縄戦で守備司令部があった首里をめぐって日米で最も激しい戦闘が行われた嘉数の高地で犠牲となった朝鮮人戦死者386名を慰霊するために建立された²。1971年1月に松本明重が京都で結成し、同氏



青丘之塔



青丘之塔 碑文

が中央執行委員長を務めていた日本民主同志会³が中心となり、世界救世教、伊勢神宮、橿原神宮、知恩院、御寺泉涌寺、伏見稲荷大社、茶道家元表千家・千宗室、華道家元・池坊専永、沖縄戦没者慰霊事業奉賛会、宜野湾市嘉数地区、三和銀行、日本船舶振興会などが協賛して建立された。碑文にもあるように、板門店から運んだ38個の小石が写経と共に碑礎に鎮められているという。「青丘之塔」がある嘉数の高地には同じく嘉数の戦場で戦没した第62師団独立歩兵第13大隊に所属していた京都府出身の将兵2,536名を祀る「京都の塔」が1964年に建立されているが⁴、その7年後に建てられた「青丘之塔」に祭られた386名の朝鮮人も同じ第62師団に所属していたのではないかと推測される。

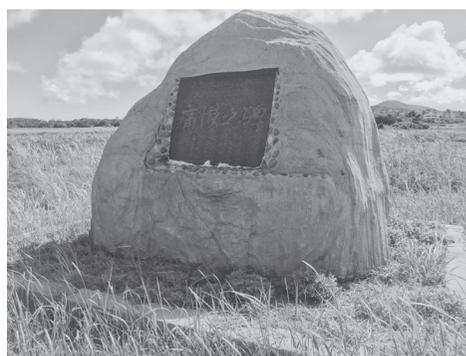
(3) 痛恨之碑

所在地：久米島具志川村西銘大田辻

設置日：1974年8月20日

設置者：沖縄在・在日朝鮮人久米島島民虐殺痛恨之碑建立実行委員会

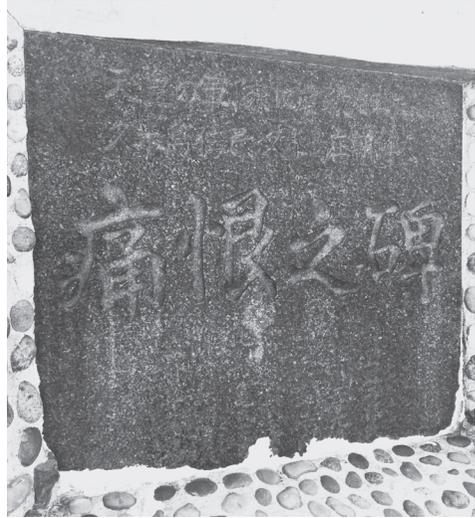
碑文：「天皇の軍隊に虐殺された久米島島民、久米島在朝鮮人痛恨之碑」。碑には虐殺された具仲会（谷川昇）さんをはじめとする7家族20名の名前が刻まれている。安里正二郎、宮城栄明、その妻および義弟、比嘉亀さんとその妻ツル、長男の比嘉正山、小橋川共晃、糸類盛保、仲村渠明勇、妻のシゲ、長男明広、谷川昇、妻のウタ、長男一男10歳、長女綾子8歳、二男次夫6歳、二女八重子3歳、生後1年で未入籍の幼児⁵。



痛恨之碑

沿革：沖縄戦では、沖縄守備軍による住民虐殺事件が各地で繰り返されたが、そのうち最も象徴的で陰惨な住民虐殺事件が、1945年6月から8月にかけて久米島で起こった「久米島事件」であった。在久米島朝鮮人であった具仲会（日本名 谷川昇）さんも、その犠牲者の一人であった。1945年8月20日、日本海軍通信隊の指揮官鹿山正兵曹長の命令の下、常恒定電信長によって、具さんと幼い乳飲み子までをも含む一家7名が虐殺された⁶。スパイ容疑という理由からだった。多くの論者が指摘するようにこの「谷川さん一家虐殺」にはスパイ容疑のほかに、「朝鮮人蔑視と差別」という問題が根深く絡んでいた。1974年8月、黒花崗岩がはめ込まれ、具仲会さんの故郷である釜山から送られてきた玉石が敷かれている⁷2.5メートルの高さの「痛恨之碑」が建てられた⁸。『わんがうまりあ沖縄』や『隠された沖縄戦』で知られている富村順一さん、ルポライターの赤嶺秀光さんら沖縄出身者が中心となった「沖縄在朝鮮人、久米島島民虐殺痛恨之碑建設実行委員会」が碑を建てた⁹。富村順一さんは『隠された沖縄戦』で、自身が幼い頃に具さんと知り合いで、具さんが本島の本部渡久地を中心に古鉄買いをしていた時代をよく記憶していると書いている¹⁰。富村さ

んはそうないきさつもあり、谷川さんが虐殺された事件は身近な問題として、この事件の責任がどこにあるのか厳しく追及しなくてはならないと考えるようになったという。富村さんをはじめ建立委員会の人々の思いは「これは決して「慰霊の碑」ではない。むしろ死んでいった人々の恨みを刻んだものだ」として「痛恨之碑」と名付けた。「鹿山事件を私たち沖縄人は、みんなに伝えなくてはならない。久米島の殺戮を過去のこととして忘れるのではなく、これからの闘いに結びつけよう。死んだ人の霊にかけても」という強い思いからであった¹¹。「痛恨之碑」建立後、富村さんらは1976年に「久米島訴訟を支える会」を結成し、遺族への正当な国家賠償と誠意ある謝罪を要求する訴訟をおこすべく地道な活動を行った。現在も久米島では毎年慰霊の日を前後して慰霊祭を行っているが痛恨之碑へのフィールドワークが行われ、平和ガイドであり語り部である佐久田勇さんによって「久米島事件」が語り継がれている。



痛恨之碑 碑文

(4) 韓国人慰霊塔

所在地：糸満市字摩文仁

設置日：1975年8月

設置者：韓国人慰霊塔建立委員会

碑文：「1941年太平洋戦争が勃発するや多くの韓国青年たちは、日本の強制的徴募により大陸や南洋の各戦線に配置された。この沖縄の地にも、徴兵、徴用として動員された1万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった。祖国に帰りえざるこれらの冤魂は、波高きこの地の虚空にさまよいながら雨になって降り風となって吹くであろう。この孤独な霊魂を慰めるべくわれわれは全韓民族の名においてこの塔を建て謹んで英霊の冥福を祈る。願わくば安らかに眠られよ」



韓国人慰霊塔

沿革：糸満市摩文仁にある「韓国人慰霊塔」は、韓国の各道から集められた石で積み上げ

られた石塚状に建てられており、塚の前の円形広場には、故国の方向を示す矢印が埋め込まれている。

中央に大きな碑石があるがそこには朴正熙元大統領の自筆で「韓国人慰霊塔」「大韓民国大統領 朴正熙」と刻まれている。また、円形広場にはいる手前に3つの大きな石版がありそこには韓国語、英語、日本語でそれぞれ碑文が刻まれている。

「韓国人慰霊塔」は1971年11月に地方本部として組織された大韓民国居留民団沖縄県本部が中心となり、韓国政府が3千万を補助して建立された¹²。韓国政府が「韓国人慰霊塔」を建立した背景には、米軍基地が集中する沖縄で総連（在日本朝鮮人総連合会）の影響力が拡大する¹³ことへの懸念があり、「北朝鮮の沖縄浸透阻止」を主要目的に、慰霊事業を対北朝鮮戦略の一環として行った¹⁴。

(5) 平和の礎

所在地：糸満市摩文仁

設置日：1995年6月

設置者：沖縄県

碑文：「建設趣旨 私たち沖縄県民は去る沖縄戦などで尊い命を失ったすべての人々に哀悼の意を表し、悲惨な戦争の教訓を後世に正しく継承するとともに、沖縄の歴史と風土のなかで培われた「平和のこころ」を広く内外にのべ伝え、世界の恒久平和を願い、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を記念して、ここに「平和の礎」を建立する 1995年6月 沖縄県」
沿革：「平和の礎」は国籍や軍人、非軍人の区別なく沖縄戦で戦没した24万余りの名前を刻んだ碑で、恒久的平和を創出するという理念のもとに、単なる「慰霊の塔」ではない、「非戦を誓う碑」として、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年にあたる1995年6月に沖縄県（県知事・大田昌秀）によって建立された。碑刻銘者のなかには、敵味方に分かれて戦った沖縄県出身者も含まれる日本側と米英側の戦没者だけでなく、朝鮮半島から強制連行されて沖縄で犠牲となった朝鮮人、台湾出身の戦没者の名前も含まれている。「平和の礎」は、戦没者



平和の礎



平和の礎

の氏名が刻まれている黒曜石が国別に幾重にも波状系に並んでいるが、朝鮮半島出身の犠牲者は「大韓民国」と「朝鮮民主主義人民共和国」に区画され刻銘されている。朝鮮半島出身犠牲者の刻銘は1996年から2003年までに予算が策定され、韓国明知大の洪鐘泌氏に委託された。洪氏の精力的な活動によって2004年までに423名の名が刻まれ、予算の切れた2004年からは独自の調査活動によって2008年に23名、2010年に1名の名前を刻銘することができた。2010年時点での刻銘された数は、朝鮮半島北部出身者を合わせて447名であった¹⁵。刻銘作業は2010年から中断していたため、沖縄戦で多くの朝鮮人が所属していた第32軍直轄の特設水上勤務第104隊にいた権云善、朴熙兌さんの遺族が刻銘を希望しているのを、「NPO法人沖縄恨之碑の会」（代表 安里英子）が県と県議会宛に陳情書を提出するなどして支援した。県は「沖縄戦で亡くなったことを証明する公的書類の添付がなければ申告票を受理できない」という立場を貫いていたが¹⁶、「恨之碑の会」の陳情や署名活動などの積極的な支援活動によって、2017年3月中旬に行われた刻銘審査会で追加が認められた¹⁷。またこのほかに韓国政府の傘下にある公益財団「日帝強制動員被害者支援財団」（ソウル）が支援した13名の追加刻銘が認められ、この分を含め、朝鮮人犠牲者の刻銘者数は2017年6月の時点で南北を合わせて462名となった¹⁸。

(6) アリラン慰霊のモニュメント

所在地：渡嘉敷村渡嘉敷の里原

設置日：1997年11月9日

設置者：モニュメントをつくる会（代表 橋田浜子）

碑文：「第二次世界大戦末期、日本本土防衛の捨て石とされた沖縄の戦場に、朝鮮半島などから千余名の女性たちが日本軍の性奴隷として、また万余の男性たちが軍役の奴隷として連行されました。海上特攻艇の秘密基地とされた慶良間の島々には、千余の「軍夫」が苦役に、21人の女性が「慰安所」につながれました。1945年3月26日米軍上陸の前夜、住民たちは日本軍によって無念の死を強制されました。一方で「慰安婦」たち4人は非業の死をとげ、日本軍の迫害と虐殺による「軍夫」たちの犠牲は数百人にのぼります。「将兵に性を売った女」として、半世紀以上も歴史から抹殺されてきた20万人余の女性たち。その存在に光をあてた記録映画「アリランのうた—オキナワからの証言」(1991年監督朴壽南)の制作活動に参加した橋田浜子は、戦後、帰郷の道を失って沖縄に取り残された渡嘉敷の元「慰安婦」ペ・ポンギさんが死後5日目(1991年10月19日)に発見されたことに衝撃を受け、悲惨な犠牲を強いられた女性たちを悼み、心に刻むモニュメントの建立を呼びかけました。阿嘉島の垣花武栄をはじめ全国から資金が寄せられました。渡嘉敷村の皆様からは、戦後初めて韓国から慰霊団を招きこの地で催した合同慰霊祭(1990年10月27日)が機縁ともなって、建立地の提供など物心にわたるご支援をいただきました。生命を象徴する玉石は、韓国の彫刻家チョン・ネジン氏より寄贈された作品です。モニュメント制作には、伊集院真理子・本田明など県内外から多くの人が参加して、渡嘉敷に築窯、共同作業によって、完成しました。モニュメントの完成に至る年月は、日本の国家責任を問い、自らの尊厳の回復を求めて立上がった、アジアの被害者のたたかいと結び合い、私たちが歴史への責任を自らに課した日々でもありました。このモニュメントが、再び侵略戦争を繰り返さないために真実を語り継ぎ、生命の讃歌をうたう広場となることを祈念しつつ。美しければ 美しきほどに 悲しがる 島 ゆきゆきて 限りなき 恨 浜子 1997年10月14日
アリラン慰霊のモニュメントをつくる会」

沿革：沖縄施政権返還後の1975年10月に、



アリラン慰霊のモニュメント

強制送還を避けるため自らが日本軍「慰安婦」犠牲者だったと入管に申告したことで世に知られることになった裴奉奇さん（当時30歳、アキコ）をはじめ、キクマル（28歳）、カズコ（23歳）ハルエ（23歳）、スズラン（20歳）、アイコ（16歳）、ミッチャン（16歳）と日本名がつけられた7名の朝鮮人女性たちは、日本軍が渡嘉敷島に駐留してからわずか2カ月で設置した慰安所に連れてこられ、戦時性暴力の犠牲者となった。碑文にもあるようにこの日本軍「慰安婦」犠牲者を追悼するモニュメントの建立は、1991年10月に亡くなった日本軍「慰安婦」犠牲者の裴奉奇さんの死をきっかけに、日本軍「慰安婦」犠牲者と軍夫を記録した映画「アリランのうた—オキナワからの証言」の監督である朴壽南さんとその製作支援者らが1992年に「つくる会」を組織し建立を全国に呼びかけたことから始まった。95年7月に始まった製作作業は、途中、用地取得問題で中断されたが、村民が所有地を無償で提供したことにより再開し、建立の趣旨に賛同した数百人のボランティアによって完成した¹⁹。高さ5メートルのモニュメントに使用された琉球石灰岩も県内の造園業者から寄付されたものであった²⁰。日本軍「慰安婦」犠牲者の慰霊碑（塔）が建立されたのはこのモニュメントが全国で初めてのことで、慶良間諸島にいた21名の「慰安婦」犠牲者と渡嘉敷島にいた350名の軍属を慰霊するために建立された²¹。



アリラン慰霊のモニュメント

(7) 留魂之碑

所在地：石垣市大浜

設置日：1998年6月23日

設置者：大田静男

碑文：「留魂之碑碑文 天皇の軍隊により人間の尊厳を奪われ、無念の死を遂げたアントン丸のひとたち、慰安所で汚辱にまみれ死亡したばばはるさん、久部良沖で銃撃にあい死亡し荒野に葬られた朝鮮人の女たち、名前がありながら無名とされているひとたち、その霊を慰め、痛恨の叫びを胸に刻み、人間の尊厳を脅かす一切の権力を永遠に許さない為此の碑を建立する 1998年6月23日建立」

沿革：留魂之碑は、石垣島を中心に八重山で犠牲となった朝鮮人軍夫や日本軍「慰安婦」

犠牲者を調査してきた大田静男さんが自宅の私有地に建立した祈念碑である。

石垣島には陸海軍合わせて9,000名が配備され、陸軍の飛行場建設や拡張工事に沖縄本島や地元の住民、朝鮮人軍夫が多数動員された。これらの工事は海軍関係の工事を請負っていた原田組が担い、その下請けの管理の下に朝鮮人労務者が多数連れてこられたが、その人数は最盛期には600名以上²²だと言われている。大田さんは朝鮮人労務者がダイナマイト使用や手作業による陣地構築、壕掘などの危険な作業に従事した跡地を調べてきた。それは朝鮮人が岩盤を削ったとされるヘーギナーの壕や震洋艇の格納壕、陣地構の跡地であった²³。また西表島内離で強制労働を課せられ戦後、鹿川に置き去りにされたために餓死や病死した朝鮮人の、いわゆる「安東丸」事件についても調べている²⁴。



留魂之碑

このほかにも大田さんの聞き取り調査によって、石垣島には、石垣市内、サンニ（山根）、カピラ（川平）、白水などの6カ所、八重山全体では10カ所の「慰安所」が確認されており、朝鮮や沖縄の女性が「慰安婦」にされたことが明らかになっている。大田さんは川平の慰安所で死亡したババハルさんと呼ばれた女性が埋葬された畑が、今はもう耕作のために破壊され、遺骨が粉々に散ってしまい不明になってしまったことに胸を痛める。大田さんが自宅の私有地に「留魂之碑」を建てたのは、このすべての朝鮮人たちの、「無縁仏」となってしまった人々の浮遊する魂が留まる場所を作りたいという思いからだっただろう。大田さんはそうして「留めて」おいた朝鮮人軍夫と「慰安婦」犠牲者の魂を青磁の骨壺に納め、2004年に韓国慶尚北道の永川の寺院で韓国の市民らと共に慰霊祭を行い、「魂」を故国の空に解き放いたという。毎年、6月23日の慰霊の日には、「留魂之碑」の前にキムチやマッコリを供えて家族や知人だけでささやかな慰霊祭を続けている。

(8) アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者恨之碑

所在地：読谷村村瀬名波

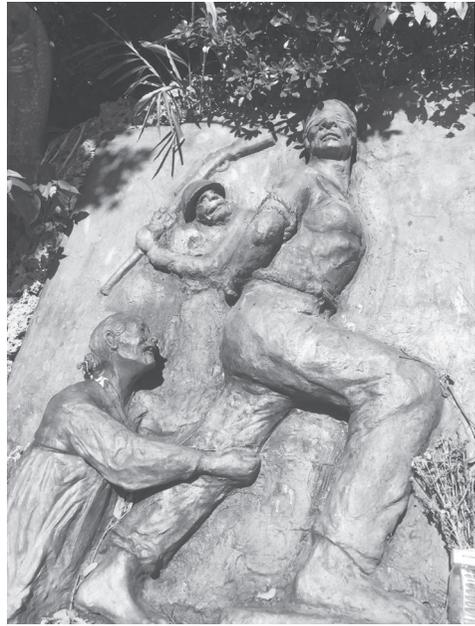
設置日：2006年5月建立

設置者：アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者恨之碑の会建立をすすめる会

碑 文：「アジア太平洋戦争・沖縄戦において日本は朝鮮半島から100万人以上といわれる人々を強制連行し、日本軍の軍夫・性奴隷として使役した。慶尚北道から軍夫たちが沖縄に送り込まれたのは1944年6月頃。姜仁昌さんは慶良間諸島の阿嘉島に徐正福さんは宮古島に配置された。沖縄の地上戦は1945年3月26日に始まった。二人は同胞たちの死を目の当たりにし、また、同胞への処刑や虐待などに立ち会わされた。私たちは朝鮮半島と沖縄に向かい合う二つの同一の追悼碑を建立することを決めた。そして不幸な過去を心に刻み平和・共存への決意を記をと多くの賛同者・団体の寄付によりこの碑を建てた。レリーフは金城実さん、碑文安里英子さん、翻訳は河東吉、2006年5月13日、韓国からの姜仁昌さん、徐正福さんとともに除幕式を行った。アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者恨之碑の会建立をすすめる会」

沿革：1944年7月から那覇、座間味村、阿嘉島で強制労働を強いられた元朝鮮人軍夫の姜仁昌さん、同年8月に宮古島に連行された徐正福さんが、沖縄で犠牲になった仲間の遺骨を探し慰霊碑（塔）を建立したいと1997年の12月に沖縄を訪れた。二人は遺骨探しと慰霊碑（塔）の建立のほかに、当時の未払い賃金の支払いを日本政府に求める活動を行ってきた²⁵。この要望をきっかけに翌年の1998年から

沖縄を中心に全国で「太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者恨之碑」建立の運動がはじまった。「恨之碑」は韓国と沖縄に向かい合う形で同一の碑を建てるという構想だった。碑の製作は読谷村在住の彫刻家である金城実さんが引き受けることになり、韓国の遺族会や姜仁昌さん、徐さんとの話し合いの結果、碑の名前は「アジア太平洋戦争・沖縄戦被徴発朝鮮半島出身者恨之碑の会」に決まった²⁶。1999年8月12日にまず韓国の慶尚北道・英陽郡に「恨之碑」が建立され、それから7年後の2006年5月に読谷村瀬名波に朝鮮人軍夫2,815名を追悼する「恨之碑」が完成した。恨之碑は、後ろ手に縛られ処刑場に連行され



恨之碑



恨之碑

る男性と足元にすがる母親らを描いた高さ2.7メートル、横2メートルのブロンズのレリーフと、不戦を誓う碑文が日本語と朝鮮語で刻まれた石碑からなる²⁷。

(9) アリランの碑

所在地：宮古島市上野野原

設置日：2008年9月7日

設置者：宮古島に日本軍「慰安婦」の祈念碑を建てる会

碑文：①「アリランの碑」：「アジア・太平洋戦争当時この近くに日本軍慰安所があった。朝鮮から連れてこられた女性たちがツガガーにて洗濯の帰りにここに休んでいたことを記憶している。悲惨な戦争を二度と起こさぬため



アリランの碑

世界の平和共存の想いをこめ、この碑を後世に伝えたい。2008年9月7日 与那覇博敏

②「女たちへ」：「アジア太平洋戦争期、日本軍はアジア太平洋全域に「慰安所」を作りました。沖縄には130カ所、宮古島には少なくとも16カ所あり、日本や植民地・占領地から連行された少女・女性が性奴隷として生活することを強いられました。2006年から2007年にかけて「慰安婦」を記憶していた島人と韓国・日本の研究者との出会いから碑を建立する運動が始まり、世界各地からの賛同が寄せられました。日本軍によって被害を受けた女性の故郷の11の言語と、今も続く女性への戦時性暴力の象徴として、ベトナム戦争時に韓国軍に被害を受けたベトナム女性のために、ベトナム語を加え、12の言語で追悼の碑文を刻みます。故郷を遠く離れて無念の死を遂げた女性たちを悼み、戦後も苦難の人生を生きる女性たちと連帯し、彼女たちの記憶を心に刻み、次の世代に託します。この想いが豊かな川となり、平和が春の陽のように暖かく満ちることを希求します。この碑をすべての女たちへ、そして平和を愛する人々に捧げます。2008年9月7日 宮古島に日本軍「慰安婦」の祈念碑を建てる会」

沿革：米軍が宮古島を「南西諸島攻略の重点」と考えると予測した日本軍は、米軍上陸に備えて3万もの軍隊を送り込み1943年9月頃から軍の飛行場建設をはじめた。島全体が要塞化されるなかで17カ所の慰安所（2012年現在）があったことが確認されている²⁸。小学生の頃に「慰安婦」たちが洗濯帰りに休んでいた姿を覚えている島民の与那覇さんは、その場所に琉球岩石を置いた。「この石に朝鮮語で何かの碑文を入れて平和のための小さい平和の森をつくりたい」願っていた与那覇さんは、2006年から宮古島に調査に訪れていた研究者の洪允伸さんたちにその願いを伝えた²⁹。2007年5月、梨花女子大の教授尹貞玉さんを団長とした共同調査団は与那覇さんの思いが込められた琉球岩石の隣に「希望の木」と名付けた木を植え、翌年の2008年9月に与那覇博敏さんが置いた琉球岩石を「アリランの碑」

と名付けた。そしてその後方に、「慰安婦」とされた女性を記憶し平和を願う気持ちを込めて「女たちへ」という12の言語で刻まれた祈念碑が置かれた。



希望の木



女たちへ



碑文

3. 考察

以上、沖縄県内9カ所に建立する朝鮮人犠牲者の慰霊碑（塔）・追悼碑を調査した内容について、所在地、設置日、設置者、碑石の特徴、沿革の項目でまとめた。調べた内容をさらにいくつかの特徴に絞って整理し、考察してみたい。

一つは建立主体の整理である。9カ所の慰霊碑（塔）・追悼碑のうち、「平和の礎」、「恨之碑」、「韓国人慰霊塔」、「青丘之塔」の4基は本島に、そのほかの5基は慶良間や久米島、宮古、八重山地域など離島に散在している。本島にある4基の内、「平和の礎」は沖縄県が、「韓国人慰霊碑」は韓国政府が建立した。「青丘之塔」は日本民主同志会という組織が中心とな

り伊勢神宮などの神社界、日本船舶振興会や三和銀行などの財界が協賛して建立した。本島では唯一、読谷村の「恨之碑」だけが、行政や財界の後ろ盾によらない、沖縄と韓国の市民たちの力で建てられた。沖縄戦に連行され壮絶な戦場を生きのびた元軍夫の呼びかけと、その声に寄り添った沖縄と韓国の市民らの交流と運動が「恨之碑」を建てたのである。

一方、離島の5基すべては、沖縄住民と同じく犠牲となった朝鮮人を悼みその歴史を風化させてはいけないと強く望む地元の住民たちであった。久米島の「痛恨之碑」を建てた富村順一さんや、赤嶺秀光さん、宮古島の与那覇博敏さん、石垣島の大田静男さんをはじめとする沖縄の住民たちの大きな役割と尽力があり、また、「白玉之塔」に朝鮮人「慰安婦」犠牲者の遺骨を納めた渡嘉敷島の新里吉枝さんや、朝鮮人軍夫の犠牲について証言した知念朝睦さん、また無償で土地や碑石を提供し様々に慰霊碑（塔）・追悼碑建立に尽力した住民の存在があった。そして沖縄戦で犠牲となった朝鮮人の悲劇と歴史を風化させてはいけないという沖縄の住民、島民たちの強い思いに他県や韓国の多くの人々が結びつき、慰霊・追悼碑が建てられたのである。今回の現地調査、関係資料の整理によって朝鮮人の犠牲を悼む9基の慰霊碑（塔）・追悼碑のうち6基が実にこうした沖縄住民と多くの市民たちのはたらきによるものだということを重要な点として確認することができた。このような人々の存在とはたらきがなければ、歴史のある事実について知り得なかったかもしれず、また、その出来事が起こった現場、場所に赴き、その情景を想像してみることもできなかったかもしれない。そのように考えると、慰霊碑（塔）・追悼碑は一つの重要な歴史的史料であるという点も改めて認識させられるのである。

次に、建立の時期を年代別に整理してみると、1960年代が1基（「白玉之塔」）、1970年代が3基（「青丘之塔」、「痛恨之塔」、「韓国人慰霊塔」）、1990年代が2基（「アリランのモニュメント」、「留魂之碑」）、2000年代が2基（「恨之碑」、「アリランの碑」）となる。『沖縄県史各論編 6巻 沖縄戦』には2012年に沖縄県が実施した「戦没者の慰霊碑（塔）に関する現状調査」の内容が紹介されており³⁰、2012年現在で440基ある沖縄県の慰霊碑（塔）を、場所や年代、形式ごとに分析しその特徴と傾向を紹介している。9基の朝鮮人犠牲に係わる慰霊碑（塔）をそのままこの分析全体にあてはめることは適当でないおそれもあるが、「復帰」後は「本土」から戦友会や遺族会が大挙して戦跡巡拝に訪れるようになり、1970年代と80年代には旧軍関係者による建碑の最盛期を迎えた³¹ という指摘は「青丘之塔」と「韓国人慰霊碑」などの建立の背景を考える上で重要な点として考慮される。実際、「青丘之塔」の碑文には「散華、御霊、顕彰、英勲を讃える」などの戦争賛美の言葉が随所に出てくるし、「韓国人慰霊塔」では、韓国人青年たちを、日本へ強制的に徴兵、徴用され虐殺、犠牲となった人たちといいつつも、彼らを「英霊」として呼ぶなど、朴正熙政権の「大東亜戦争観」、植民地支配への捻じれた歴史認識、主体性を露わにしている³²。

また、『沖縄県史』では「一方で1980年代以降に「集団自決」、「強制集団死」や戦争マラリア、旧植民地出身者の動員などによる個々の戦争被害の実態を記憶に留め、碑文において国家や

軍隊の戦争責任について言及する記念碑の建立も散見されるようになった³³」と指摘しているが、まさに沖縄の住民たち、そして、その人々と結びついた市民たちによって建てられた「アリラン慰霊のモニュメント」、「留魂之碑」、「恨之碑」、「アリランの碑」がこれに含まれるのである。80年代以前に建立された久米島の「痛恨之碑」に注目すれば、それは平良修さんたちによって書かれた『戦争賛美に異議あり！—沖縄における慰霊塔碑文調査報告—』で繰り返し指摘されているように、「最も特異なもの」であった。「痛恨之碑」が特異だったのは、国家の戦争責任を告発しない慰霊碑（塔）がほとんどであった頃—平良さんの言葉でいえば「沖縄県民が建てた告発の碑は皆無」だった時代に先駆的に国家、天皇の戦争責任を告発した追悼碑だったからである³⁴。その告発の精神は1998年に建てられた「留魂之碑」に受け継がれているといえるだろう。

以上のことを整理してみると、国家の戦争責任を告発しない沖縄の「慰霊」という問題、またその責任主体である国や行政が行う「慰霊」という問題と、朝鮮人犠牲者を「追悼」する沖縄住民の意識の在り方とその相関関係について深く切り込む必要があるように考える。また、今回の調査を通じて改めて「戦争責任」という問題とともに「植民地支配責任」という問題について、沖縄ではどのように考えられており、「慰霊」や「追悼」と結び付けているのかを考えさせられた³⁵。沖縄県の慰霊事業の一部として組み込まれている慰霊碑（塔）・追悼碑建立の位置づけから引き離し相対化することで、朝鮮人慰霊碑（塔）・追悼碑のもつ歴史的意味や問題点について改めて問い直す必要があるように考える。本稿は研究ノートのためここで立ち入ることはせず、今後の課題としたい。

最後に、今回の調査の過程において、久米島では「久米島事件」の語り部であり、平和ガイドをされている佐久田勇さんに貴重なお話を伺うことができ、また石垣島では「留魂之碑」を建てた大田静男さんに石垣島の戦跡や慰安所のあった跡地などをめぐるフィールドワークに案内していただき、大変貴重なお話を伺わせていただいた³⁶。ここに深く感謝申し上げたい。

注記 本稿は、平成28～30年度文部科学省科学研究費助成金基盤研究（C）「沖縄と朝鮮半島を跨ぐトランスナショナルな戦争記憶の歴史的考察」（研究代表者・若林千代、課題番号16K03064）からの助成を受けた。

注

- 1 『軍隊は女性を守らない—沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』2012年、アクティブミュージアム「わたしの戦争と平和資料館」（WAM）、21頁
- 2 大田昌秀は著書『沖縄戦の教訓と慰霊—沖縄の「慰霊の塔」』で青丘の塔について「沖縄戦で戦没した朝鮮半島出身者（軍夫・従軍慰安婦）386名を祀る」と記しているが、「慰安婦」についての記述は碑文にも見られず、またとくに出典がないためその根拠については確認できない。

(大田、前掲書、87頁)

- 3 日本民主同志会の性格については公安調査庁第二部長、谷藤助の答弁を参照のこと。第078回国会 ロッキード問題に関する調査特別委員会 第5号(昭和51年10月26日)。http://kokkai.ndl.go.jp/SENTAKU/sangiin/078/1700/07810261700005a.html
- 4 大田昌秀『沖縄戦の教訓と慰霊—沖縄の「慰霊の塔」』2007年、那覇出版社、54頁
- 5 ハンギョレ新聞のハン・スンドン記者によると具仲会さん一家7名の名前は「平和の礎」にも刻銘されているが、表記は谷川姓で朝鮮人区画の碑石ではなく沖縄人区画の碑石に刻まれている。下記URLを参照。ハン・スンドン記者//ハンギョレ新聞社http://japan.hani.co.kr/arti/politics/21567.html
- 6 「沖縄のソニミ事件」と呼ばれる久米島での虐殺を命じたのは指揮官である鹿山正兵曹長であったが、直接、具さん一家七人を残忍な手口で惨殺したのは当時電信長だった常恒定という人物である。奄美大島出身であるこの常の生々しい告白は大島幸夫のルポに詳しく記されている。(『沖縄の日本軍』新泉社、1982年(新版)223~226頁を参照のこと。)大島は、具さん一家七人の壮絶な虐殺のプロセスには何人かの島民も関係しており、「日本本土—奄美—沖縄—朝鮮と錯綜した差別と偏見の重層構造が絡んでいると指摘する。日本の敗戦後に起こった虐殺であったこと以外に「事件はそれまでの虐殺とどこか異質な深刻さを帯びて」おり(116頁)、「鹿山隊長の非道といった一次方程式で解き明かせるものではないと指摘している(211頁)。
- 7 久米島で平和ガイドをされている佐久田勇さんとのインタビュー(2017年7月12日)。また、「痛恨碑除幕式」『琉球新報』1974年8月21日も参照のこと。佐久田さんはインタビューのなかで、当時、久米島には具さん一家のほかには朝鮮人の家族が儀間に暮らしていたという貴重な話をされた。この朝鮮人家族は虐殺を免れ、戦後、沖縄本島に移ったという。
- 8 同上、『琉球新報』1974年8月21日
- 9 「きょう除幕式 久米島虐殺慰霊塔(碑)」『琉球新報』(地方版)1974年8月20日
- 10 富村順一『隠された沖縄戦』JCA出版、1979年、79~82頁
- 11 大田昌秀『久米島の沖縄戦』沖縄国際平和問題研究所、2016年、338頁
- 12 「北の沖縄浸透危ぐ、韓国人慰霊塔建立の背景に」『琉球新報』2006年3月31日
- 13 在日本朝鮮人総連合会沖縄県本部は、1972年9月6日に組織された。
- 14 琉球新報はこの件が2006年3月30日に公開された韓国の外交文書で明らかになったとし、その詳細について報道した。
- 15 沖本富貴子『「平和の礎」に朝鮮人犠牲者刻銘作業を推し進めよう』軍夫研究会、2016年5月9日
- 16 「朝鮮人戦没者礎に、恨之碑の会刻銘求め陳情」『沖縄タイムス』2016年10月6日
- 17 「平和の礎朝鮮人二人追加刻銘 2010年以来沖縄戦没者」『琉球タイムス』2017年4月8日
- 18 「朝鮮人犠牲者刻銘板で哀悼会 平和の礎」『琉球新報』2017年6月21日
- 19 「悲しい過ち繰り返さない—和解のシンボルに 従軍慰安婦らのみ霊慰め」『琉球新報』1997年

11月10日付

- 20 「慰安婦の慰霊塔（碑）を建立」『沖縄タイムス』1997年11月10日
- 21 同上
- 22 『第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団報告書』1972年、第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団、49頁
- 23 大田静男『八重山の戦争』南山舎、1999年、38、88頁
- 24 安東丸事件については前掲の「強制連行真相調査団」の調査によって初めて明るみに出た事件だ。このとき調査団は置き去りにされたと思われる場所に追悼の意をこめて『安東丸乗組朝鮮人殉難之地』とするした標柱をたてたそうだ（前掲、報告書、56頁）。大田さんの聞き取り調査によれば朝鮮人が置き去りにされた鹿川は大潮や台風の激しい場所で、標柱はおろか遺骨も波にさらわれ不明となっているという。安東丸の残骸は内離島成屋の浜に船底部分だけが残っているのが確認された。太田静男、前掲書、247～248頁
- 25 「遺骨探しに協力を、元朝鮮人軍夫2人が来沖」『琉球新報』1997年12月23日
- 26 「韓国と沖縄に恨之碑を」（上）平良修『沖縄タイムス』2004年9月22日
- 27 「同胞しのび元軍夫ら涙 恨之碑除幕2815人追悼」『沖縄タイムス』2006年5月14日
- 28 『軍隊は女性を守らない—沖縄の日本軍慰安所と米軍の性暴力』2012年、アクティブミュージアム「私たちの戦争と平和資料館」（WAM）、26頁
- 29 日韓共同「日本軍慰安婦」宮古島調査団、『戦場の宮古島と「慰安婦」』2009年、なんよう文庫、84頁
- 30 「二、慰霊塔（碑）の建立状況の変遷と霊城整備事業」『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』673～682頁
- 31 同上、676頁
- 32 評論家の藤島宇内は、韓国人慰霊塔の建立をめぐる動きについて「韓国と沖縄を結ぶ心理作戦」という論考の中で次のように記している。「摩文仁の丘に慰霊塔（碑）を建てるという計画が1975年1月16日の那覇市民会館で開かれた「韓国人慰霊塔建設募金・日本創作舞踊集団公演」で公表された。主催者は民団沖縄県本部で、全世均団長の挨拶は次のようなものだった。“このたび私どもが念願しておりました沖縄および南方地区で戦没者犠牲となった人々のために韓国人慰霊塔を建設することになりました…（中略）何卒皆々様方のご協力を得て立派な塔が建設されますようご支援賜りたいと存じます…（中略）…日本創作舞踊集団は引き続き台北、台中市およびソウル特別市を訪問公演の予定ですが、各地とも盛会に終わるよう心からお祈り申し上げご挨拶いたします” KCIAと台湾の特務が緊密な関係をもっていることは沖縄のマスコミでは常識だが、そういう「韓」台関係がこの挨拶にあらわれている。この公演にはもちろん、アメリカ領事夫妻や崔青天領事も出席した。屋良県知事はすでに昨年10月に東京の民団本部の団長の申請を受けてその建立を認可し、糸満市は土地を無償で提供していたのである。…（中略）…かつての朝鮮に対する旧日本帝国主義の植民地支配の犠牲者を、今日の新しい日本帝国主義

の「韓国」に対する再侵略と関係つけずに、過ぎ去った昔の話として慰霊することは、朴政権の心理作戦の一つであり、日本政府や大企業や軍国主義勢力もそれに協力している。沖縄ではすでに1971年3月に宜野湾市嘉数地区に「青丘之塔」という「朝鮮出身者沖縄戦没者慰霊塔（碑）」が建っている。…（中略）…一体、このような過去の犠牲者の慰霊を今日の韓国に対する再侵略をやっている日本の反動勢力、その手先になっている朴政権、それを支持する日本の勢力がなぜやりたがるのか。もちろんそれにはいろいろなメリットがあるからだ。まず、新たな今日の植民地主義を「良心」の煙幕でごまかすのに役立つ。過去の侵略の代償という口実によって、朴政権はより多くの援助を日本政府から出させることができるし、それによって日本の企業は韓国への経済侵略をより一層行うことができ、日本の「韓国ロビー」のふところも大いにうるおうわけである。つまり過去を単に過去のものとして「慰霊」したり、「反省」したりすることは新たな植民地主義による再侵略に利用できるのである。沖縄では昔の沖縄戦の体験は十分に分析されず、「沖縄県民もよく戦った」という形で肯定的に考えられてきたため、沖縄戦跡地には全国各地の保守的な立場の勢力が建てた慰霊塔（碑）が立ちならび、靖国神社なき靖国神社になってしまっている。だからこそ、そこに朴政権もこのような慰霊塔（碑）を建てることのできる余地があるのだ』『現代の眼』1975年6号、142～143頁

- 33 前掲、「二、慰霊塔（碑）の建立状況の変遷と霊城整備事業」『沖縄県史 各論編 第6巻 沖縄戦』、676頁
- 34 平良修ほか、『戦争賛美に異議あり！—沖縄にける慰霊塔碑文調査報告—』1983年、靖国神社 国営化反対沖縄キリスト連絡会、38、43頁
- 35 例えば「平和の礎」に刻銘されている朝鮮半島の死没者は「厚生省の資料を基に整備している」（『「平和の礎」建設基本計画書』沖縄県編集・発行1993年、『沖縄県史』684頁から再引用）が、「朝鮮半島出身者は多くが創始改名で強制された日本名しか確認できないため、総連や韓国政府外務部に依頼し実名に戻す作業をして遺族の了解を得たもののみが刻銘されている」（『沖縄県史』684頁から再引用。「「平和の礎」問題を考える」、「平和の礎」とは何か）、新崎盛暉『沖縄同時代史第6巻、基地のない世界を 戦後50年と日米安保』凱風社、1996）。そのような実務的な手続きを必要とした刻銘作業の経緯があったために「朝鮮民主主義人民共和国」と「大韓民国」に区画されたのだろう。しかし、多くの論者が指摘しているように「平和の礎」に朝鮮人女性の名前が刻銘されていないことなども含めて、そもそも厚生省の資料に準ずる規定が様々な制約をもっているのは事実であり、今後は正されなくてはならないと考えるが、実務的な手続きのレベルにとどまらない、植民地支配に対する責任という立場から刻銘作業は行われねばならず、そのような観点から朝鮮半島出身者を植民地主義の遺産である南北の分断体制に組み込むことになる「慰霊・追悼」事業について批判的に検討される必要があるだろう。
- 36 筆者自身による「留恨之碑」の写真撮影は、諸事情により叶わなかったため、ここに掲載された碑の写真は大田さんから提供されたものであることも併せてお断りしておきたい。